

まちかど・ズーム IN!

能楽の魅力を楽しみながら学ぶ

謡曲・仕舞入門教室



碧水園で1月26日、2月2日、24日、3月9日の4日間、初心者を対象とした謡曲・仕舞入門教室が開かれました。

市民など約20名に手ほどきしたのは、昨年6月の碧水園記念公演「羽衣」でシテを務めた観世流能楽師の小島英明さん。受講生たちは、謡曲教室では腹式呼吸による発声の基本から指導を受け、「高砂」の一節を大きな声で抑揚をつけて謡いました。また仕舞では、実際に舞台上がり、能独特の動きである「すり足」や扇子の持ち方などを学びました。

公民館まつり

石井めぐみさん、文化講演会で熱弁



第21回公民館まつりが3月8日から10日まで中央公民館で開かれ、芸能発表や作品展示など、公民館で生涯学習に取り組んだ人たちが1年間の成果を披露しました。

文化講演会では、女優の石井めぐみさんが「やさしい街、やさしい人」と題して熱弁。重度障害児として生まれてきた長男の子育ての苦難の日々を語りながら、子供から学んだこと、そして健常者の何倍もの努力をしている多くの障害者の方々から、強い力を得たことなどを話されました。最後に「勇気を出して障害者と接してほしい。障害者が住みよい街はだれが住んでもよい街。やさしい街を皆さんでつくってください」と、きゃしゃな体からは想像もつかない力強い口調で、聴講者に熱く語りかけました。



男女が共に助け合って



ホンネで語ろう男と女

中国の北京から越河に嫁ぎ、妻として、母として、育児用がん具メーカーの管理職として、白石や大阪、北京を飛び回る生活を送っている張司紅(ちょうしこう)さんを囲んだ「ホンネで語ろう男と女」が2月28日、あしたば白石で開かれました。張さんは「中国では女性が働いていることは当たり前で、妻が夫より地位も収入も高いことも珍しくない」など、中国と日本の習慣の違いや男女の生き方について、約40名の市民の前で熱弁。相手を理解し、助け合うことが大切と話されました。

卒業おめでとう

手をつなぐ育成会「卒業を祝う会」

中央公民館で3月3日、障害のある子供を持つ親たちでつくる白石市手をつなぐ育成会による「卒業を祝う会」が開かれました。

初めに市内の小学校や中学校、養護学校を卒業する12名へ記念品が手渡されました。続いてボランティア団体によるオカリナ演奏や歌などの祝福を受けました。卒業生たちは「進学しても一生懸命に勉強する。就職先でも頑張る」などと抱負を話していました。



いつまでもお元気で!

齋藤しんさんに100歳のお祝い



特別養護老人ホームえんじゅに入所している齋藤しんさんが、3月2日に100歳の誕生日を迎え、敬老祝い金10万円が贈られました。

川井市長が「100歳、おめでとうございます」と話しかけると、しんさんは「本日は誠にありがとうございます」と、顔をほころばせながら答えていました。

なお、贈られた10万円は、しんさんの希望で社会福祉協議会などへ寄付されました。

みなさんからの素敵な情報を待ってます!

精神障害者の社会参加を支援

白石うぐいす会がNPO法人に

精神障害者の社会参加を支援するため、NPO法人(特定非営利活動法人)化を目指していた「白石うぐいす会」が2月19日、県よりNPO法人に認証されました。

今後は、精神障害者の通所作業所「ボプラ」の運営のほか精神障害者の保健福祉の向上を目指し、さまざまな活動に取り組んでいきます。

白石うぐいす会は市内では3番目のNPO法人で、精神障害者を対象とするNPO法人は東北では初めてとなります。



認証されたことを川井市長に報告する「白石うぐいす会」の今野英繁理事長(中央)

清掃作業で汗流す

スポーツ少年団清掃奉仕



少年野球やサッカー、空手などのチームで構成される白石市スポーツ少年団本部が3月3日、白石川緑地公園に集まり、周囲を一斉に清掃する奉仕活動を行いました。

今回参加したのは20団体の小学生や父母など約350名。約1時間にわたって、たばこの吸い殻や空き缶などのごみを拾い集めました。

「こけしの森フォーラム」があつて青森県の黒石へ出張した。黒石市の鳴海市長からの特別のご配慮で、盛岡駅まで公用車で、

鳴子町長と二人で送迎いただいたのは大変恐縮したが、どうもその時体調を崩してしまつたらしい。

一週間程、暇な時は家に帰って休むようなことをしていたが、どうも調子が悪い。そこでちつと新聞を見たら、浅田次郎の「天切り松蘭がたり」第三巻の広告が出ていた。

一巻、二巻を図書館から借りて、三巻並べて暇に任せて読んでいたが、これがまたむやみに面白い。と同時につくづく今の



川井市長のせせらぎトーク

強き者より滅ぶ

世の飽食の世界と、大正末期の悲惨な時代とを比較させるような物語であつた。

ちよとバブルがはじけ、失われた十年と言われた今と、第一次世界大戦で日本が漁夫の利を得、その好景気がはじけた大正末期と時代もまたよく似ている。しかし当時の庶民の生活の苦しさは今のようなものではなかったようである。

東京の下町に住んでいた姉弟の姉は、吉原遊郭に身を沈め、スペイン風邪で死んでしまう。スリの親分に預けられた弟は、その姉を背負って投げ込み寺まで歩く。姉弟の父親は、最後まで死んだ女房の骨箱を

抱えながら、肺病でのたれ死をしよう。この親子がいた下谷の長屋では、食事はズケ屋だった。軍隊や大企業の食堂で余つたものの払い下げを受け、それを一銭とか二銭とかいふ金で売っていたズケ屋から飯を買い、それで飢えをしのいでいた時代の物語である。

我々は今、こんなに素晴らしい時代に生きています。しかしそれは物質的に豊かな時代であるということであつて、精神的な貧しさはどうであるか。政界の癒着、企業におけるモラルの崩壊、そして凶悪な犯罪の激増。どうとらえてもこれは世紀末の時代ではない。

我々の先人はかつて、この国をどのように作り上げるかの夢を持っていた。私たちが今必要なのは、人間の物質的所産(production)と精神的所産(culture)を峻別し、芸術、宗教、道徳などに関わる分野を重視することだろう。百四歳になられた大徳寺如意庵の立花大亀老師は、かつてこう書かれた。

『私は敗戦直後の日本をどうするかというとき、第一にまず経済復興であると思ひまして、多くの財界人とお会いして経世済民を唱えて歩いてきました。以来その勢いをかりて拡大に努め、世界じゅうで活躍し、現代の繁栄を勝ち取つたのであります。しかしちと浮かれすぎです。このままいつたら、日本だけでなく、人類が破滅してしまいます。私の哲学に、強き者より滅ぶ、というのがあります。』

そこで私は侘びの精神を要求するのです。現代と未来について思うとき、どうしても私は侘びてもらいたい。科学はもっともつと侘び的に創造してほしいのです。『東京赤坂のサントリー美術館の中に、立派な茶室がある。でも茶の精神とビルの中の茶室はどうも不似合いだ。音楽の殿堂サントリーホールとサントリー美術館の中の茶室の取り合わせよりは、白石のホワイトキューブと碧水園の方が、はるかに文化的所産のような気がするのだが。』